

三遠南信地域連携センター設立の精神とは

愛知大学経済学部教授 佐藤元彦

三遠南信地域連携センターは、2004年10月1日に設立された。1946年11月15日に創立された愛知大学は、設立趣意書に地域社会への貢献を高らかに謳っており、実際、地域（「郷土」と言ってもよいが）の研究には創立当初から力が入れられてきた。また、地域の将来を担う人材の育成にも積極的に取り組んできたことは、地域社会での卒業生の活躍ぶりに示されている通りであろう。

創学から半世紀を過ぎてから新しく立ち上げられたセンターは、そうした伝統を踏まえながらも、大学を取り巻く情勢の変化から、さらにそれを前に進める必要があるとして構想された。当時経済学部長・理事でもあった私は、センター設立の答申とりまとめを仰せつかっていたが、センターをどのようなものにすべきかについて、まずは地域社会の声を聴くことに努めた。行政、経済界はもちろんのこと、NPOや市民にも多くのことを学んだ記憶がある。その中で頭に浮かんだのが「大学の中に地域を置き、地域の中に大学を置く」というキャッチフレーズであった。前半部分については、センターの運営（当時の「センター会議」）に学外者を半数以上含めるという形をとった。これは、愛知大学の歴史の中でも殆ど前例のない経験ではなかったかと思う。一方、後半部分については、「待ち」ではなく、大学から積極的に社会に出ていく、という形で実現を目指した。センターを介しての学外機関との連携協定締結は、その一つの実例である。

その上で、三遠南信地域を念頭に取り組みを進めようとしたのであるが、それは、既に三遠南信地域の連携が相当に進んでおり、新しい時代の地域のあり方として注目されていたからに他ならない。こうして、足元の地域だけに限定せず、今後の新しい地域のあり方も視野に入れ、それを「新しい公共」を形成しながら考えていく場を大学として提供しようという、設立趣旨がとりまとめられるに至った。これは、既存の地域の枠組みを前提にし、立地している地域に重点的、直接的に貢献するという他の多くの大学がとってきたと思われるスタンスとは異なるものであった、と言えるかもしれない。別言すれば、三遠南信という越境地域でなければ、センターの独創性は発揮できなかったのかも知れない、と考える昨今である。